# 恋心

水城朱音

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
恋心

【Ｎコード】
Ｎ４７５２Ｄ

【作者名】
水城朱音

【あらすじ】
２５歳になる川原亜子は義理の弟祐樹に恋心を抱いている。意地っ張りな彼女は中々その思いを口に出来ないでいるが…。

## 第1話：義理の弟（前書き）

はじめまして、水城朱音と申します。
これが初投稿になる小説なので、もしかしたら見苦しい部分もあるかと思いますが、よろしくお願いします。

## 第1話：義理の弟

ジリリリリリ！！

いつも6時半きっかりに鳴り出す目覚まし時計。
この時間に起きなければまず間違いなく会社には遅刻してしまう。

しかし、朝に弱い私は中々布団から出る事ができない。

「おい、亜子！いい加減目覚まし止めろよ！毎朝毎朝うるせーぞ！！」

そう言って私の部屋に入ってきたのは3つ年下の義理の弟、祐樹だ。

「うぅぅん、もうちょっと…」

私はまだまだ寝たりなくて布団で頭を隠す。

「もうちょっとって…起きなきゃ遅刻だぞ！」

何やら布団の外で祐樹が大声を張り上げている。
これがいつも繰り広げられる祐樹と私の光景だ。

祐樹は大げさに「はぁっ」とため息を吐くと布団に手を伸ばし思いっきり引っ張った。
すると、そこには大の大人が丸まって寝ている。こいつは猫か！？
そう言いたくもなるが、これもいつものこと。

急に無くなった暖かい温もりにどうしようもなくなって、渋々起き上がりその温もりを奪い去った張本人を睨みつける。

「ちょっと！寒いじゃない！何すんのよ！？」

「寒いじゃねーよ！起きろって！」

腕を組んで見下ろしてくる祐樹の顔は怖い。こんな時は逆らってはいけない。

「あーはいはい。起きればいいんでしょ？」

私は仕方なしにダラダラとベットから降りてクローゼットまで移動する。

そんな私を一瞥すると「ったく、やっと起きたか…」などと、ぶつぶつ言いながら祐樹は部屋から出て行った。

スーツに着替え、下に降りて洗面所へ行って顔を洗う。それからリビングに向うとご飯のいい匂いがしている。

「やっとお出ましか。飯なら出来てるから早く食えよ」

「うん。ありがと」

そう。朝ごはんを作るのは私では無い。

祐樹は私より早く起きて毎朝朝食を作ってくれる。

ほんと出来たやつだと思う。

この家には私と祐樹の２人暮らしだ。

３年前までは赤の他人同士だった私達が一緒に住むキッカケになったのは、うちの母親と祐樹の父親が再婚したからって言うのが大まかな理由。

最初は家族４人で暮らすって話だったんだけど、うちの母親が新婚気分を味わいたいと駄々をこね、私達の住んでいる家から１０分程度のところにもう一軒家を建て、さっさとそこに引っ越していってしまった。

残された私達はどうするか散々話し合い、折角立てた一軒家を手放してしまうのはもったいないと言う事でこの広い５ＬＤＫの家に一緒に住むことになったのだ。

そして、今年２５歳になる私、川原亜子（かわはらあこ）は義理の弟の祐樹に密かに恋心を抱いてたりする。

## 第2話：私って頑固者？

ご飯を食べ終えた私は、洗面所に行き簡単な化粧をする。一旦部屋へ戻ってコートを羽織り、マフラーを首に巻きつけ、鞄を持って玄関へ向った。

「じゃぁ、行って来るねー」
「おう」

大声を張り上げてリビングに向ってそう言うと、外へ出た。

真冬になった今では寒さが身にしみる。
マフラーを口元に寄せて駅まで歩いて向う。
１０分ほどすると駅が見えてくる。
ここは都心から離れた土地で比較的駅前も閑散としていて小さな商店街があるだけ。

そこから電車を乗り継ぎ1時間ほどで会社に近い駅に到着する。
だから朝は7時過ぎには家を出ないと、始業時間には間に合わない。

朝が弱い私には6時半起床がギリギリ。
だから毎朝起こしてくれて、朝ごはんまで作ってくれる祐樹には感謝してもしきれない。

そんな彼は家から２０分ほどの所にある大学に通っている。

きっと背も高く、モデルか！？っと言うほど綺麗な顔立ちをしているから大学ではそれはそれはモテるんだろう。
しょっちゅう可愛い女の子が尋ねて来て、彼女か浮気相手かと誤解

される。

そんな時はホントに参ってしまう。

私が彼を好きでなければこんな事態、笑ってすませられる。
でも彼の事を好きな私は毎回のように傷ついている。
心を痛めながら、それでも意地っ張りな私は何でもない様に振舞ってしまう。

ホント馬鹿だなって思う。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

会社に着くとまず最初にするのが上司へのお茶出しとメールチェック。
この会社には事務として入社した。私の主な仕事は、資料などの文章作成、コピー取り、営業の人が持ち帰った請求書などの会計など結構忙しい。

「おはよう」

パソコンを開いてメールを確認していると声を掛けられた。
相手は同期の高島優子(たかしまゆうこ)。

優子とはこの部署に一緒に配属になってからの友達だ。
同期と言っても短大卒の彼女は私より2つ年下。だからと言ってお互い気を使う事も無く、いまでは歳も関係なく気の合う友達になった。

「あぁ、優子か。おはよう」
「優子かって失礼ねー。ところでさ、今日は昼休み一緒に外で食べない？」
「外で？」
「そう。近くにいい店みつけたんだー。いいでしょ？」
「うーん」

今日は仕事が立て込んでるし、ホントは食堂の方がありがたいんだけどな…

どうしようかと迷っていると、始業のタイムが鳴ってしまい、優子は返事も待たずに「じゃ、また後でね」と言って自分の席へと行ってしまった。
仕方なく小さなため息をついて、それからは昨日残してしまった仕事を片付けにかかった。

自分の仕事に没頭しているといつの間にかお昼休みになっていたのか、優子が話しかけてきた。

「亜子ちゃん、もうお昼だよ。早くご飯食べに行こう！」
「えっ！？もうそんな時間？じゃあ、行こうか」

そう言って私はコートと財布を手に取ると、優子の後についていく。
その日優子が連れて行ってくれたのは、会社から5分程のところに

あるパスタのお店だった。
店内はそれほど広くは無いし、昼時にも関わらず数人しか席に座っていなかった。

「最近見つけたんだけど、ここのパスタなかなか美味しいんだよ」

まぁ、待たされることも無く席に座ることが出来たのはちょっとうれしい。
メニューを開くと結構種類があってどれもおいしそうだ。

食べるものも決まり店員さんを呼んで注文する。
出来上がりを待つ間、優子が祐樹の話題を出してきた。

「ねぇ、亜子ちゃん祐樹君とはどうなの？」
「どうって？」
「だから、なんか進展は無いのって聞いてるのっ！」
「進展たって…」
「だって、亜子ちゃんは祐樹君のこと好きなんでしょ？」
「そうだけど！仮にも姉弟だし…。好きだなんて、そんなの口に出せるわけ無いわよ…」
「えー、姉弟って言っても血は繋がってないんだから、気持ち伝えるぐらいいじゃない？」
「そんなことしたら一緒に住めなくなる！」
「でも、ずっとこのままって言うのも…」
「もういいの。この気持ちはずっと私の胸の中にしまっておくんだから」
「はぁ…亜子ちゃんって見かけによらず結構頑固者なのね…」
「はいはい。どうせ私は頑固者ですよ」

そこへ店員さんがパスタを持って現れた。

目の前にパスタが置かれると、優子は目を輝かせて見ている。
どうやら話はもういいらしい。

「わぁ、おいしそう。いっただきまーす！」

早速一口食べた優子はとっても美味しそうにしている。それを見た私は自分のパスタを口に運ぶ。

「うん。おいしいわね」
「だねー！また今度来ようね！」
「そうね」

そうしてお互いパスタを食べきると、お昼休みが後１０分と言う事もあり、さっさと席を立つと会計を済まし会社に戻ることにした。

## 第3話：嫌な自分

急いで会社に戻って自分の席に着くと、テーブルの上に置いてある携帯にランプが光っているのに気がついた。

携帯を開けて液晶を見るとメールのマーク。
誰からだろうと早速ボタンを操作してメールを開く。

どうやらお昼休みの間に届いていたらしい。相手は祐樹からだった。

Ｆｒｏｍ：祐樹
Ｓｕｂ：ごめん
今日夜飯いらなくなった。

なによ。たったこれだけ？
はぁ…。今日も一人で食べるのか…。

最近またしても新しい彼女が出来たのか、祐樹は滅多に早く帰ってくることは無くなった。
今まで一緒に暮らしてきて分かった事は、付き合った女は3人以上はいるって事。
帰ってきても私が寝た後だから、何時に帰ってきているのかはわからない。
だから夜は一人でご飯を食べるか、優子を誘って飲みに行って気を紛らわせている。

今日は金曜。
明日は会社が休みだし、優子誘って飲みにでも行くかな…。

社内用のメールを開きそこに必要事項を書き込むと送信を押す。
すると数分もたたないうちにメールが届く音が鳴り、返信が届いた。
もちろん相手は優子だ。視線を優子の方へ向けると手をヒラヒラさせている。
メールを読んでみると、どうやら優子も私を飲みに誘おうと思ってたらしかった。

午後は比較的余裕が出来てちょっと暇になってきた時だった。

「川原さん、悪いんだけど、これ会議に使う資料２０部コピーしてくれる？」

そう言って話しかけて来たのは、課長の藤崎健吾（ふじさきけんご）だ。
彼は２７歳という若さで課長に抜擢された所謂エリート。
その上、スラっと背も高く、顔も悪くない彼は女子社員に人気がある。

「あ、はい。会議は４時からでしたよね？」
「うん。それまでに用意してくれればいいから。じゃ、よろしく」
「わかりました」

急ぎの仕事も無いので、席を立ち資料を持ってコピー室に向う。
するとそこには先客が居たのか、女子社員が２人何やら話し込んで

いた。

「でね、私ついに告白しちゃった」

「えぇぇぇぇっ！あの藤崎課長に！？で、返事は？」

思わずでた名前に無意識に聞く耳を立ててしまう。なんたって上司が告白されたとなっては、普段なんとも思っていなくとも気になってしまう。

ここはさっさとコピーをしてこの場を立ち去ったほうがいいかもしれない…。

「それが…思ったとおり、だめだった…」

「そっかぁ。だめだったかぁ」

「でも、これで諦めがつくし、告白できてよかったかも」

そんな会話をコピーを取りながら聞いていた。

私もダメでもいいから告白してこのモヤモヤした気持ちを精算できたらどんなにいいか。

姉弟として出会っていなかったら、彼女のように素直に告白でも出来たんだろうか…？

いや、意地っ張りな私はきっと本音をぶつけるなんて事は出来ないかもしれない。

それでも名前も知らない彼女の事を羨ましく思った。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

優子と飲みに行って自宅の近くに着いたのは、すでに深夜1時。
タクシーの運転手に運賃を払って車を降りると、バタンっと音を響かせてドアを閉め走り去っていった。

いい感じに酔いが回っていた私は、寝静まったシーンとしている住宅街をフラフラと歩いて家まで向う。

あと家まで5mという所で門の前に誰かが居るのに気がついた。

暗くてよく見えないが、背格好からしてあれは祐樹だろう。

そして祐樹に寄り添うようにして立っているのはきっと彼女。

胸に痛みが走った…

祐樹は私の方に背を向けていて、ここに私が居るなんて事は気がついていない。
しかもあんな所に居られたら、もちろん家には入れない。どうする事もできず、その場で立ち止まっていると、一瞬彼女の方と目が合った。
その目は明らかに嘲笑っているようにしか思えなかった。

物凄く気分が悪くなり、何でもいいから早くその場から立ち去ってほしかった。

しかし、次の瞬間そこを立ち去ったのは私。

それは祐樹が少し俯いて彼女にキスする寸前。私は重なろうとしているシルエットを見ていられなくなり、踵を返すとその場から離れた。

なんとか曲がり角まで来て、壁に体を預ける。

酔ってフラフラな上、目の前が涙で霞んでいく。

今までは祐樹が彼女と2人で居るところなんて見たことも無かったし、だから胸を痛めるだけで、涙は流さないでやって来れた。

しかし、今さっき見た光景は明らかにキスする直前。

自分の心の中にどす黒い感情が渦巻く。

こんな自分が心底嫌だった。

## 第4話：嘘

しばらくして時計を見ればあれから1時間も経っている。

いい加減に家に帰らないと…

少し酔いも覚め、冷静を取り戻した私は家に帰ることにした。

まだあの2人がいたら…ってそんな事あるわけ無いか…

あれから1時間は経っているからもう誰もいないことは分かっていてもあの時の2人が頭をちらついてどうしようもない。

そんな思いを抱きつつ家へ向かうとそこにはやはり誰もいなかった。

安堵のため息を吐いて静かに玄関のドアを開ける。

すっと身体を玄関に入れ、鍵を掛けた所で今、一番顔を合わせたくない人物が目の前で仁王立ちして私を睨みつけていた。

「おかえり…」

「た、ただいま…」

「こんな時間までなにしてた？」

まるで子供を叱る母親のようなセリフ。

そんなのこっちが聞きたい。

「…優子と飲みに行ってただけよ。悪い？」

「別に、悪かないけど…」

「……」

「亜子…」
「私だって…もう子供じゃないんだから、ほっといてくれる？てか、何時までもそんな所に立ってられると入れないからそこ退いて」
先ほどの事もあり、これ以上祐樹を目の前にしていれば、平常心ではいられなくなってしまう…
それでなくとも、祐樹に対してさっきから嫌な言葉遣いになってしまっているのだ。

とにかく今は一人になりたい。

私の言葉でそこを退いたのを確認して、祐樹の横を通り過ぎようとした時だった。

「ちょっと待てよ」

そう言って私の腕を掴んだ祐樹は、顔を見なくても怒っているのがわかる。
掴まれた腕が痛い。

「……離して」
「なぁ…、さっきからお前変だぞ！」
「そう？ただ酔っ払ってるだけよ…それは祐樹の気のせいなんじゃない？」
「気のせいって…」
「とりあえず、手離して…疲れてるから、早くシャワー浴びて寝たいの」

その時の私は、祐樹がどんな顔をしていたかなんて、まるで気がついていなかった。

そう言うと祐樹の手を離し、階段を上り自分の部屋まで行き扉を閉めると、ズルズルとその場にへたり込んだ。
冷静を取り戻したはずだったのに、まだ酔いが回ってるんだろうか。
あれは明らかに八つ当たりだ。
「もう…何やってんの…私」
ポツリと呟いた私の言葉は、誰に聞かれることも無く、静かな部屋にスッと消えた。
＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝
＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

「亜子！いつまで寝てんだ！もう昼だぞ！！いい加減起きて飯食え！」
「うぅぅ」
なんだか、祐樹の声が聞こえる。それに伴って頭がぐわんぐわんい

っている。
俗に言うこれが二日酔いと言う症状か？
だぁぁぁぁぁ、頼むからそんな大声出さないでほしい…
ただでさえあの後眠れなくてやっと寝付いたと思われる時間は早朝5時ごろ。
もうちょっと労わってよぉ…

「うーー頭痛いから…そんな大声ださないで…」
「はぁ？二日酔いか？昨日どんだけ飲んだんだよ！？」
「え…、覚えてない」
「じゃあ、昨日何時に帰ってきたのかも覚えてないのか？」
「……覚えが無いです…」

なんていうのは嘘。
ホントは全部覚えてる。
でもここで、昨日の事は覚えていなかったことにすれば、気まずい思いをしなくても済むと、あの後必死に考えた私は嘘をつくことにした。

二日酔いはホントだけどね…

## 第４話：嘘（後書き）

第４話まで読んでくださってありがとうございます。
コメディを書くつもりでこの話を書き始めたのですが、なんだかコメディから遠ざかって仕舞ったので、カテゴリーをコメディからシリアスに変更しました。
すいません／／
まだまだ文章能力の無い私ですがこれからもよろしくお願いします。

## 第5話：俺の好きな人

俺は3年前から好きな女が居る。
そいつは俺より年上で、朝には滅法弱い人。

父さんはある日いきなり会わせたい人がいると言って、俺を無理やりレストランまで連れて来た。
そして訳がわからないうちに席に通され、ふて腐れているとある女性が現れた。
その人は父さんが今付き合ってる人。斉藤真紀（さいとうまき）だったっけ？
これまでにも、何回か会った事があった。
軽く会釈して顔を上げると、彼女の後ろに女の人がいるのに気がついた。
その人は真紀さんの隣に座ると自己紹介してきた。

それが亜子だった。その時俺は初対面にもかかわらず、一目で惚れてしまっていた。
今までの俺には無かった感情が駆け抜けて、正直どうしたらいいか惑った。

この俺が一目惚れなんて…

でも、出会い方がまずかった。
その後父さんたちが結婚して、姉弟となってしまった俺はこの気持

ちを気づかれないように必死に3年間過ごしてきた。

それこそ、どうでもいい女と付き合って。亜子からすればきっと、ちゃらちゃらした男に思われているに違いない。

父さんたちが別の家を買って引っ越して行った時、亜子は当然、別々に部屋を借りて住もうと言い出した。

だけど、どうしても亜子と一緒に居たかった俺は、折角立てた一戸建てを売るのは勿体無いと必死に説得した。

俺の説得に、確かに一理あると判断したのか、亜子は一緒に住む事を承諾してくれた。

それから一緒に住むようになって分かった事は亜子は朝に弱い。

そんな彼女を毎日のように起こしに部屋に行き、寝顔を見てはどんな思いをしているのか…

今日も朝6時半きっかりに鳴る目覚まし時計の音を聞いた俺は、台所で作業していた手を止めて亜子の部屋に向った。

部屋の前まで来て一度深呼吸する。

今まで何回も入ったことのある部屋だけど、この扉の向こうに亜子がいるのかと思うと、気持ちを落ち着かせないと何をするか分からない。

だからこうやって深呼吸してからじゃないとこの部屋には入らない。

ガチャッ

「おい、亜子！いい加減目覚まし止めろよ！毎朝毎朝うるせーぞ！！」

「うぅぅん」

そう言いながら更に布団に顔を隠すと二度寝をしようとしている。俺はわざと大きなため息を吐くと、亜子から布団を剥がす作業に取り掛かる。

布団をむんずと掴み思いっきり引っ張り上げると、そこには丸まって寝ている亜子の姿。

いい加減にしないと襲っちまうぞ…

そんな事を考えてるなんて知らない当の本人は、寒さに負けて観念したのかもぞもぞと身動きすると起き上がり、眠そうな目を必死に細めて睨みつけてきた。

「ちょっと！寒いじゃない！何すんのよ！？」

「寒いじゃねーよ！起きろって！」

腕を組んで見下ろしてやる。そうすれば亜子は逆らえないのを俺は知っている。

「あーはいはい。起きればいいんでしょ？」

亜子は仕方ないといった風にダラダラとベットから降りてクローゼットまで移動する。

そんな亜子を一瞥すると「ったく、やっと起きたか…」と、やれや

れと俺は部屋から出て行った。

台所に戻ると、作りかけの朝食を仕上げに掛かり、亜子が1階に降りて来るまでにはダイニングテーブルへと運ぶ。

何度も言うが、朝に弱い亜子は俺が朝食を用意しない限り食べないで会社に行ってしまう。

今までどうしてたんだろうかと思ったが、きっと義母さんが作っていたんだろう。

丁度全ての皿をテーブルに置いた時だった。

ドタドタと足を音をさせてどうやら2階から降りてきたらしい。

亜子はそのまま洗面所のほうへ行く。暫くすると、リビングの扉が開き亜子が入ってきた。

俺はそれを確認して声を掛けた。

「やっとお出ましか。飯なら出来てるから早く食えよ」

「うん。ありがと」

そう言って椅子に座り、おいしそうに俺が作った料理を食べているのを見るとなんだか餌付けしている気分だ。

てか、亜子だから俺は料理を作ってやってる。

これがどうでもいい今の彼女なんかには、絶対にやらない行動だろうと思う。

それからご飯を食べ終えたのか「ご馳走様」と律儀に両手を合わせ

た亜子は、急いで支度すると玄関から大声で呼びかけてきた。

「じゃあ、行ってきまーす！」

それに「おう」っと返事をすると亜子は出て行った。

これが俺達の朝の光景。この先変わる事があるのだろうか？

## 第5話：俺の好きな人（後書き）

出来れば評価、感想などありましたらぜひお願いします。
それを励みに頑張ります。
もちろん、皆さんの意見も参考にしたいと思っています。
ではでは。失礼しました。

## 第6話：合コンの誘い

「よお！」
「ごぉほっ」

ここは大学構内の食堂。
コンビニで買ったパンに噛り付いていると、肩を思いっきり叩かれ、むせてしまった。

「な、何すんだよ！？」
「はぁ？挨拶しただけだろ？」
「だからって口に物ほお張ってる人間を思いっきり叩くやつが何処にいんだ！」
「ここ」
「…あぁ、お前に言ったのが間違いだった…」

目の前に座った男は浅尾隆司（あさおりゅうじ）、この大学に入って知り合った悪友。
他にも友達が居ないわけじゃないが、なぜかコイツとは馬が合い一緒に居る事が多くなった。

「なぁなぁ、お前最近あの上田愛莉（うえだあいり）と付き合い始めたって噂はホントか？」
「なんだよ急に」
「いや、ホントだったら彼女あんまりいい噂聞かないからさ、気つけたほうがいいぜ」
「あぁ、そんな事か」
「なんだよー、その薄い反応は」
「別に…」
「ちぇっ！つまんねー奴」

上田愛莉。こいつとは最近付き合い始めた。
俺は昔っから来るもの拒まず、去るもの追わず。そうしていろんな女と付き合ってきた。
それがいいのか、どうなのか分からない。
何度も亜子を諦めようと、他の女と付き合ってそいつを好きになろうと何度も思った。
でも、結果はいつも同じ。
自分から告白してきて付き合ったにもかかわらず、「ホントに私の事好きなの？」「いつまでたっても私を見てくれない」「他に女が居るんじゃないの！？」などと好き勝手な事を言って俺の前から去っていく。
まぁ、最初っからどうでもいい女だから去っていったからといって追いかけることもしない。
まして、自分から付き合ってくれだなんていったことも無かった。

今回もキッカケは何も面白みも無く、ただ単に向こうから告白されて、俺も今はフリーだったし、まぁいいかって感じで。
言っちゃ悪いが、ハッキリ言って愛莉にはあまり興味は無い。

「そうだ、祐樹。今日は暇か？」
「いんや。今日は一応デートって事になってる」
「一応って…お前はもてない男の敵代表だな」
「はいはい。スイマセンね」
「まぁ、いいや。じゃあ来週だったら時間あるか？」
「なんだよ。何かあんのか？」

いつものように厄介事を持ってくるこいつは、こういう言い方をするときは必ずと言っていいほど得な事を言わない。
だから隆司を睨みつつ話をうながしてやると、案の定少し慌てたよ

うに「ここじゃちょっと…」そう言って隆司は俺を食堂の隅へと連れて行くと、コソコソとしゃべり始めた。

「いやー実は…、合コン計画しちまってさー。まさかお前彼女作ってるだなんて知らなかったもんで、メンバーに入れちゃったんだよ…」

「はぁっ！？何してんだよ！」

「お前が合コンとか嫌いなのは分かってる」

「じゃあ、お断りだね」

「そんな事言うなよー、相手は先輩の知り合いで、念願のＯＬなんだよ。頼むよーもう相手にＯＫもらって後は日にち決めるだけだからさ」

「……」

「なっ！一生のお願いだ！！この通り！！」

手を合わせ頭を下げる隆司は必死だ。

まぁ、こいつがこんだけ頼むって事は滅多に無い事だし、今回は仕方ない乗ってやるか…

「おい、わかったから頭上げろよ」

そういった瞬間バッと顔を上げた隆司はなぜか目に涙まで貯めている。

そんなにＯＬと合コンできてうれしいのかよ…年上好きってのは前々から知ってたけど…

呆れた気持ちでいると隆司は何を血迷ったか俺に抱きついてきた。

「祐樹っ！好きだ！！」

「ちょっっ！抱きつくな！！そして誤解を受けるような事をいうん

じゃねぇぇぇぇ！！」

バゴッ！！

「いでっ！！」

そうして周りの冷たい視線を感じつつ、痛い思いをしたにも関わらずへらへら笑う隆司を心底友達になるんじゃなったと後悔した。

## 第7話：最低な男

講義が終わったら今日は愛莉と約束がある。
映画を見に行く予定だ。きっと夜飯も奢らされるんだろうと昼、亜子にメールを送っておいた。返事が無いって事はＯＫっていうこと。駅で5時に待ち合わせだ。今は5時少し前。このまま駅に向うしかない。

駅のロータリーに着くとすでに愛莉が待ち合わせ場所に立っていた。そういう光景を見ると、あれが亜子ならどんなにいいのかと考えてしまう。
愛莉とデートしてるのに姿格好、年齢さえも違うのに亜子と重ねてみてしまう。
こりゃかなり重症ってやつだと思った。

映画も見て、食事を済ませ、さぁ帰ろうって時になって愛莉は面倒な事を言い出した。

「ねぇ、私…祐樹のお家に行きたいなっ！いいでしょ？」
「それ無理」
「なんでよ？」
「家には姉貴が居るから…」

ったく。んな事言わせんじゃねーよ…

「へぇ…お姉さんいたんだ」
「そう。だからダメ」
「じゃあ、お姉さんに挨拶したいな。紹介してくれるでしょ？」

はぁ？何言ってんだコイツ。お前なんかを亜子に紹介するわけねーだろっ！冗談じゃねぇ…

心の中で毒ついているだなんてまるで気がついていない愛莉は腕にしがみついて来て上目使いで見上げてくる。

あーマジうぜぇ。どうすっかな…

とりあえず、家まで連れてって亜子は寝てるってことにして追い返すか。

「はぁ、わかったよ」

「ホント！？やったぁ！早く行こう！」

そう言ってうれしそうな愛莉を家まで連れて行く。

心の中でため息を何度も吐き出した。深夜1時過ぎ。こんな時間に家に押しかける女は今までいなかった。

「ここだけど…」

そう言って立ち止まった俺に愛莉は顔を上げて家の方に向いた。

「ここ？おっきい家だね」

「なぁ、もうこんな時間だし姉貴も寝てるだろうから帰れよ」

「えーー？ここまで来たのに家にも入れてくれないの？」

「俺だって朝早くて疲れてるからもう寝たいんだよ…」

「うーん……」

「な？帰れって」

「…じゃあ、キスしてくれたら帰るっ」

なんだ…そんな事か。さっさと帰ってくれんなら、キスの1つや2つ、してやるさ。

「わかったよ」

そう言って愛莉の腰に手を回し、自分に引き寄せると顔を近づける。

重なり合った唇。

今、重ねているのは愛莉の唇なのに、目を閉じて思い出すのは亜子の顔。

胸が苦しくなった。俺は最低な男だ。

そんな軽い気持ちでした行為を、まさか亜子が見ているなんて、その時の俺は思ってもいなかったんだから。

## 第8話：休みの代償

あの後。
貴重な週末を、二日酔いと、寒い中1時間近く外で過ごした影響で熱を出してしまい、ベットからほとんど移動する事もなく過ごした。
その間、祐樹のお世話になってしまい、心身と共に疲れ果てる事になった。

なんとか、日曜の夜には平熱に近い体温に戻ったが、念のため月曜の仕事は午後からと言う事にしてもらった。

祐樹は午前の授業があるといって8時には家を出て行った。
いつもは私の方が見送られる立場だから、ちょっと新鮮だった。
それからは、洗濯ものを干したりちょっと部屋の掃除をして過ごしていると、いつの間にか10時前。
そろそろ支度して会社に行かなくちゃいけない。
スーツに着替えて必要なものを鞄に詰め込むと家を出た。

「今日も寒いわね…」
はぁっと手に息を吹きかけ手を擦りながら駅へ向う。

いつもとは違う電車なので比較的空いていて、椅子に座ってゆっくりと会社へ向う。
熱はすっかり平熱に戻り、これなら仕事に支障はないだろう。

心配しているだろう優子には先ほどメールをしておいた。

椅子に座って向い側の景色をぼーっと見つめていると、会社のある駅にいつの間にか着いていて、ちょっと焦った。
慌てて電車を降りて、改札を通って時間を確認する。
今はまだお昼休みだから出社にはまだ間に合う時間。
とりあえず小腹が空いた私はコンビニに寄ってから向う事にした。

店内に入った私はまず、お弁当コーナーの前に来るとおにぎり一個を手に取ると次は飲み物。
とドリンクの所へ移動した時だった。

ドリンクの前には藤崎課長。なんだかコンビニには似合わない人がそこに居た。

「おはようございます」
「えっ？」

声を掛けると課長は振り返り姿を認めるとにっこり微笑みかけてきた。

「川原さんか。おはよう」
「課長がコンビニだなんて珍しいですね」
「そう？結構ちょくちょく来るんだけどな」
「そうなんですか？」

話しながらレジに行き並んでいると、課長はさり気なく私が持っているおにぎりと飲み物を取ると一緒に精算してしまった。

「あの…お金…」
「あぁ、いいってこれぐらい。ところで具合はもういいの？」

「えっ？は、はい。大丈夫です」
「そう。よかった」

課長の隣に並んで一緒に会社へ向う。何だか変な感じだ。
会社のロビーで課長とは別れ、先に部署に戻ると優子が駆け寄ってきた。

「亜子ちゃん、もう大丈夫なの？」
「うん。大丈夫」
「そっか。よかった」

午前中休んじゃったから仕事は山のようにある。
こりゃ残業決定だな…

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

只今の時刻１７時１３分。
やはり仕事は終わらない…しかも今日に限って、明日朝一で必要な書類の作成がまだ残っている。
朝ごはんは祐樹が作っているが、夕飯は私がなるべく作るようにしている。と言っても最近は週に2，３日しか一緒に食べる事はないけど…。
それでも、もしかしたら今日は早く帰ってくるかもしれないと、一応祐樹にはメールを打っておいた。
返事はすぐ来て、祐樹も友達と過ごすからいいと言うことだった。

パソコンと睨めっこしている間に次々と人が帰っていく。
すでに優子は彼氏と約束があるといって定時に帰っていった。
時刻を見ればいつの間にか８時過ぎている。
まぁ、この調子で進めれば後３０分ほどで帰れるだろう…。
あともう一息だ！と気合を入れてパソコンを見つめる。

「……らさん…」
「あの、川原さん！…」
「え？は、はいっ！？」

キーボードをがむしゃらに打ってたから、私に話しかけているなんて思ってもいなかった私はちょっとビックリしてしまった。

「俺もう帰るけど、一人で大丈夫？」
「へ？一人？」

そう言って周りを見渡すと確かにこのフローアーに残っているのは私と彼二人だけらしい。
しかも彼は帰ると言っている。

「あー…あと少しで終わるし、大丈夫ですよ」
「そう？じゃあ、俺帰るね。お疲れ」
「お疲れ様です」

ついには一人っきりになってしまってちょっと心細いけど仕方が無い。
早く終わらせて帰ろう。そう思ってパソコンに向う。

「終わったぁーー！」

「あれ？川原さん？」
私があげた声とほぼ同時にシーンとしたフロアーの入り口から声を掛けられた私は乾いた悲鳴をあげてしまった。
「ごめんごめん、驚かしちゃった？」
「…課長でしたか…どうなさったんですか？」
私の質問に答える事も無く、クスクスと笑いながら私のそばへやってきた課長は隣の机に腰掛け見下ろしてきた。
「そろそろ9時だ。表に出る玄関が閉まってしまうよ」
「えっ！そうなんですか！？」
「だから早く支度して出ないと」
「そうですね。仕事もやっと終わりましたし、帰ります」
すばやく身支度をして課長と一緒にフロアーを出る。
エレベーターに乗り込んだところで課長が話しかけてきた。
「そういえば、ご飯は食べた？」
「いえ。もうお腹空いちゃって…」
「じゃあ、これから一緒に食べに行かないか？俺も何も食べてないし」
「そうですね…。じゃあ…、食べに行きましょうか」
課長と食事なんてちょっと緊張してしまいそうだが、お腹が空いていた私は軽い気持ちで誘いに乗ってしまった。

## 第8話：休みの代償（後書き）

私のお話を読んでくださってありがとうございます。
なかなか話が進んでいませんが、あともう少ししたら動くと思います。スイマセンっ
これからもよろしくお願いします＾＾

## 第9話：突然の告白

9時近い時間と言う事もあり、社員は皆帰ってしまっていたのか社外へ出るまでに誰とも会うことは無かった。
これで誰かに会ってたりしたら、明日は噂の的になるに違いない。
ホッとしながら歩いていると、課長が突然立ち止まった。
「車だから、少しここで待っててくれるかな？」
「は、はい。わかりました」

課長は急いで駐車場へ向い、一人になって少し考えた。
なんだか、これってデートみたいじゃないか？
いや、上司と部下として食事に行くんだからデートではないし…。
うーんっと首を捻って考えていると目の前に1台の車が止まり、課長が降りてきた。

「待たせたね。じゃあ、行こうか。乗って」
「あっ、はい」

初めて課長の車に乗せてもらったが、結構乗り心地がいい。

「川原さんは何か食べたいのとかあるかな？」
「うーん、これといってないんですけど、出来れば和食とかがいいですね」
「和食？」
「はい。この時間に洋食とかだとこってりな物になってしまいそうだし。だめでしたか？」
「いや。じゃあ、俺が知ってる店でもいいかな？」

「おまかせします」
課長は歳も近いし、上司と言っても比較的しゃべりやすい。
普段しゃべらないような事を言い合いながら車に乗っていると、なんだか知っている店の駐車場に入っていく。ここは、よく優子とも来ている和食の美味しいお店。

「ここですか？」
ちょっと驚いて、課長のほうを見る。

「そう。なに？ここ知ってるの？」
「知ってるっていうか、よく高島さんとも食べに来るんです」
「そっか、君達仲良いもんな」
「はい」

お店に入って店員さんに案内されたのはなぜか個室の座敷。
まぁ、男女２人きりで来店したら勘違いされてしまうのも仕方ないが…

「俺は車だから飲めないけど、川原さんは何か飲む？」
「いえ。病み上がりなので今日は烏龍茶にしておきます」
「そうだね。そうした方が良い」
「課長、何食べますか？」
「うーん、煮物は絶対食べたいな」
「あっ！ここの煮物は美味しいですよね！」

そうして1時間ほど経った頃だろうか。
それまで当たり障りの無い会話をして、2人っきりにしては会話が弾んでいたのに、突然課長は黙り込んでしまった。

「あ…あの、課長？どうしました？」
「……」

一応話しかけてみたものの、何だか重い空気を発して黙っている。
どうしたものか？と考えていると課長が口を開いた。

「…川原さん、突然だけど改まって話がしたい」
「話…ですか…？」
「あぁ。川原さんは今付き合っている人とかって…」
「い、いいえ。いませんけど…」
「そうか…」
「…？」

何だか良く分からないけど話が全く見えない。
すると今まで俯かせていた顔を上げると、真剣な顔をした課長と目が合って、ドキっとしてしまった。

「あ、あの…」
「実は、俺…ずっと前から河原さんが気になってて…」

気になってて？ま、まさかこれって！？

「好きなんだ…付き合ってくれないか？」

そういう課長の目は真剣そのもので。これが嘘偽りじゃないって事

はその表情から言ってもわかる。
しかし、私は祐樹が好きだ。
そんな気持ちを抱えたまま、この人の期待に添うことはできない…
どうしたらいいのかと、戸惑いが顔に出ていたのか課長が困ったような顔をしてこちらを見つめている。

ど、どうしよう……早く返事しなきゃ……

「あ、あの……課長のお気持ちは大変うれしいです…」
「じゃあ…」
「でも！私、他にす、好きな人がいるんです！」
「……」
「だから…そのー、課長の気持ちには…答えられません。ごめんなさい…」
「そっかぁ…ダメか…」
「……すいません…」

これまでの人生で何回か告白された事はあったけど、何度こういう場面を経験しても慣れない。
まぁ慣れるなんて事はないと思うけど…。

「でも…」

？でも？
まだなにかあるのかしら？

「好きな人が居るってだけで、その人とは付き合っていないわけだから、チャンスはまだあるってことだよな？」
「へ！？」
「川原さんには悪いけど諦めきれない。俺の気持ちはもう知ってる

わけだし…いつか振り向かせてみせるから」

そう言ってにっこり笑った課長は何だか悪魔のようだった。

## 第9話：突然の告白（後書き）

なんだか、誤解を招きそうな行動にでた藤崎ですが、彼は決してストーカーではありませんのでっ＾＾；

## 第１０話：言ってはいけない言葉

それから、課長はさっきの告白が冗談だったかのように私に接してきた。
だから私もなるべく気にしないように振舞うのが精一杯だった。

「亜子？」

そろそろ帰ろうって事になり、会計を済ませようとレジにやってきた時、突然声を掛けられた。

振り返らなくてもわかってしまう。

これは紛れもなく祐樹の声だ。

課長もいるのだ。気づかない振りをしようか…しかしそんな考えは全く無駄に終わった。

なぜなら、肩を掴まれ振り向かされたからだ。

「おい、聞こえてなかったのか？」
「えっ？あっ！祐樹…ぐ、偶然ね…」

目の前に居る祐樹の存在に頭の中が真っ白になってしまった。
何を言えばいいのか、まったく頭が働かない。
何故こんな所にいる？あぁそうだ…夕方メールした時に友達とご飯食べると返事が来ていた。

「亜子、お前こんな所で何やってるんだよ」
「な、何って…し、食事…？」
「残業じゃなかったのか？」
「そ、そうよ？」

相当私の態度がおかしかったのか、突然課長が割り込んできた。

「君、川原さんの知り合い？」
「…一応弟だけど…あんた誰？」
「弟さんね……俺は川原さんの上司で藤崎健吾だけど…」
「ふーん…なに？彼氏？」
「ゆっ祐樹！？」
「いや。告白はしたけど、付き合ってはないよ」

笑顔でそう言った課長に対して、なぜか祐樹が怖い顔で睨みつけている。

「じゃあ、藤崎さんには悪いですけど、亜子は俺が連れて帰りますから」
「へ！？ちょっと！な、何言ってるの？」
「それでは。失礼します」

そう言うと課長の返事も待たずに、祐樹は物凄い力で私の腕を掴むと引っ張って歩き出す。
こんな祐樹は今まで一度も見た事が無かった私は怖くなってしまい手を振り払う事もできずそのまま引っ張られるようにお店をでた。

「ねぇ！…ちょっと！腕…痛い！」

お店からかなり離れた所で腕の痛さに我慢が出来ず、精一杯の力を

振り絞って祐樹の手を振り払う。
いきなりの祐樹の行動に胸が苦しくなる。
それと同時に私は物凄く怒っていた。
店を出るまでは確かに祐樹が怖かった。
しかし、ちょっと考えれば課長に失礼極まりない行動をしたのだ。

「もう！！一体どうしたっていうのよ！？」
「……」
「ちょっと！黙ってないで何とか言いなさい！！」
「…別に…ただ…、今日合コンでさ。何とか抜け出したかっただけ…」

合コンですって！？冗談じゃない！

「はぁっ！？たったそれだけの理由で私をあの場から連れ出したって言うの！？あの人は私の上司なのよ？どうしてくれるのよ！」
「わかったよ。謝ればいいんだろ！？すいませんね！」
「何なの！その言い方！！」
「うるせぇ！！こんな時だけ姉貴面すんな！！」

祐樹が言った言葉がグサリと胸に刺さった。

姉貴面———

一番祐樹には言われたくなかった言葉。

その言葉に傷ついた私は自分が泣いている事にも気がつかなかった。

「なっ、何よ！祐樹のばかっ！！」

そう言って私は祐樹に鞄を投げつけるとその場を駆け出した。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

朝、隆司が合コンは今日になったと言って来た。
正直一昨日、昨日と具合の悪かった亜子が心配ではあったけど、約束は約束だ。
夕方頃、亜子からメールが来て残業になったと言っていた。

なのに、目の前には亜子と知らない男。
これは夢じゃないのかと思った。だけど、亜子は実際ここにいる。

ムカついた。
だから気が付いた時には亜子に声を掛けていた。
絶対気がついているはずなのに亜子はこちらを振り向こうとしない。
イラついた俺はすばやく近づくと亜子の肩を掴むとこちらに振り向かせた。

わざとらしく振舞う亜子に俺は言葉がきつくなる。
亜子の態度が変なのに気がついたのか男が俺達の間に割り込んできた。

この男、亜子の何なんだ？まさか彼氏じゃないよな？

そう問うと返ってきた答えは「告白したけど、付き合ってはいない」と笑顔で言いやがった。

ガツンと頭を殴られた気がした。
こういう言い方するって事はまだ諦めてはいないって事。

そんな男と亜子を一緒になんかできるか。

そう思ったが早いか「俺が連れて帰ります」と亜子の腕を思いっきり掴むと有無を言わせず店から連れ出した。

暫く歩いて、亜子が俺の手を振り払い、俺を睨みつけてきた。
亜子の表情を見れば物凄く怒っているのは分かっていた。
しかし、そのときの俺は頭にき過ぎてて、言ってはいけない言葉を口にしてしまったんだ。

「姉貴面」

それを言った瞬間の亜子の蒼白な顔。目には涙。

血の気が引いた。亜子の涙を見たのがこれが初めてだった。

「祐樹のばかっ」

そう言うと鞄を投げつけられ、去っていく亜子の姿に声を掛けることも、まして追いかける事すら出来ない俺に悔しさと悲しさが胸の中に湧いた。

## 第１１話：母の気持ち

あの後必死に走って駅に向かい、鞄を投げつけてしまったから財布は無かったけど、定期はコートのポケットに入れたままでなんとか電車には乗れた。
けど、泣いて化粧の落ちた私の顔は周りの人から見ればなんとも無様だったに違いない。
家には帰ってこれたのはいいが、肝心の鍵が無い。しかも私の方が早く帰ってきたから当然祐樹は居ない。
これじゃ、家に入れないじゃない！！
なんて馬鹿なんだろう…穴があったら入りたいぐらいだ。
どうしようと考えた挙句、私はお母さん達が住む家に行く事にした。

ピンポーン

チャイムを鳴らすと、「はーい」と言う言葉と共に扉が開いてお母さんの顔が覗いた。

「あら。亜子じゃない。珍しいわね？」
「ごめん…。鍵なくしちゃって家入れなくて…」
「そうなの？寒いし、上がりなさいよ」

そう言ってお母さんは突然やってきた娘に嫌な顔一つせずに家の中へ入れてくれた。
家の中には義父さんがいると思っていたら、残業でまだ帰ってきて

なかったらしい。

リビングに通されて、ソファに座るとお母さんがお茶を出してくれる。

一息ついていると案の定お母さんが私の顔を見て指摘してきた。

「それにしても、あんたその顔どうしたって言うのよ？」

「うん…ちょっと…」

「まぁ、何が原因かは聞かないであげるから、とりあえず顔洗ってらっしゃい」

「うん…」

理由を聞かない母さんに感謝しつつ洗面所へ向うと、中途半端に取れかかった化粧をしている自分の顔が鏡に映る。こんな顔でよく電車に乗れたもんだと思った。

リビングへ戻ると何やら母さんはどこかへ電話を掛けている。

そんな様子をボーっとソファで見ていると、電話を切った母さんがこちらへやって来た。

「今、あんたの家に電話したら祐樹君が出て帰ってきてるみたいだから、暫くしたら帰りなさい。明日も会社でしょ？」

正直、祐樹に会いたくはなかったが、ここには私の服も鞄もない。

「わかった…もう少ししたら帰るよ…」

そう言ってため息をついていると、私の隣にお母さんは座ってきた。

「ねぇ、さっきは聞かないつもりで居たけど、祐樹君となんかあっ

たんでしょ？」
「……」
「さっき、電話した時ね、祐樹君ったら挨拶もしないでいきなり「亜子はそこに居ますか！？」って。あんた鍵なくしただなんて嘘でしょう？」
「か、鍵が無いのはホントよ！！」
「あらそう。でも、自分の気持ちには正直になったほうがいいわよ？」

この母親は一体何が言いたいのだろうか？自分の気持ちには正直になったほうがいい？
私だって正直になれたらどんなに救われるか。
姉弟にならなかったら、こんな苦しい思いを抱く事もなかった。

しかし、次の瞬間お母さんが言った言葉に私は耳を疑った。

「あんた、祐樹君のこと好きでしょ？」
「……っ！な、なんで！？」
「何年あんたの母親やってると思う？それぐらい見てればわかるわよ」

あははと笑うお母さんを私は呆然と見つめていた。
なんだか言葉が出てこなかった。
まさか、自分の母親に自分の気持ちを知られてただなんて…。
「さすが、私の娘よねぇ。あんないい男に目をつけるなんて！」
などと言ってクスクス笑っている。

「あ、あのお母さん…」
「なぁに？」
「い、いつから気がついてたの？」
「それは、ひ・み・つ！」
「はぁ？何よそれ！」

半ば呆れてしまった私は大きくため息を吐くとテーブルに突っ伏した。
そんな娘がおかしいのかまだ笑っている。

「まぁ、あんたの事だから意地張って正直には言い出してこないとは思ってたけどね。でも、自分の気持ちに嘘はダメよ。私たちの事を気にしてるのかもしれないけど、あんた達は血が繋がってるわけでもないんだから、どうせなら祐樹君をものにしちゃいなさい！」
「なっ！そんなの無理よ！祐樹には彼女が居て…、私の事なんてなんとも思ってないわよ！」
「あーもー！何て情けない娘なの！？そんなの直接聞いてもいないんだからわからないじゃないの。とにかく、もう家に帰りなさい！」

そう言ってコートを掴むと私に押し付けてきた。
ソファからたつように促され玄関にやってきた時にお母さんは言った。

「私はあんたの事応援してるから、いますぐにとは言わないけど、頑張って気持ちぶつけてみなさい。」

義理とはいえ、祐樹とは、姉と弟で。
どうしてもそのことが頭にあり必死に気持ちを隠して、言う事もできないと思っていた。

しかし、お母さんのその言葉を聞いて、なんだか胸につっかえていたものが取れた気がした。

お母さんの気持ちが嬉しくて、次々に流れ出る涙を止めることが出来ず、暫くお母さんの胸で泣いた。

## 第１２話：決断した男

亜子が去っていってから暫くの間、頭を冷やして考えた俺はある決意をした。
それは、愛莉との関係を清算し、亜子との関係を現実のものとすること。

落ちている鞄を拾い、携帯を取り出すと愛莉の番号を呼び出す。
長いコールがした後、プツっという音がして愛莉の声が聞こえた。

『もしもーし』
「俺だけど」
『祐樹？どうしたの？』
「あのさ、話あんだけど…出てこれるか？」
『今から？うん。いーよー』

俺は家の近くの公園を指定し、電話を切ると急いでその場所へ向った。

俺が公園に着くと愛莉はベンチに座って待っていた。
近づく俺に気がついたのか、俯いていた顔を上げてベンチを離れると抱きついてきた。

「祐樹！どうしたの？こんな時間に…私に会いたくなっちゃった？」
「…いや、電話で言ったけど話があるんだ…」
「はなし？」
「あぁ。あのさ…」

「何？」
「勝手で悪いんだけどさ、俺好きな奴居るから別れてくれ……」
別れてくれと言った瞬間、愛莉は言っている事が信じられないといった顔をした。
「え…？突然、何言い出すの？冗談でしょ？」
「冗談じゃなくて本気」
「どうして！？絶対嫌よ！別れるなんて！！」
「んな事言われたって、もう俺はお前と付き合う気はない」
俯いて涙を流す愛莉には罪悪感を感じるが…
俺の気持ちは固い。
「……せいね…」
それまで俯いていた愛莉が何か呟いた。しかし、小さくて聞こえない。
「は？」
「あの女のせいでしょ！？」
「あの女？」
何を言い出すかと思えばあの女？意味がわからない。
しかし、次の愛莉の言葉でその女が誰なのかがわかった。
「あの日！そう、祐樹の家に行った時！通りでこっちを見てたスーツ着た女の事よ！！あの女のせいなんでしょ？」

「ど、どういう…」

スーツ着た女？ま、まさか…亜子の事を言っているのか？

「その女、祐樹の事見て逃げ出したのよ！？それって祐樹と関係があるからでしょ！？」

あの時俺はこいつに何をした？

そうだ。キス迫られて…まぁいっかって軽い気持ちで…俺は…

…まさか……あの瞬間を見られてたって言うのか？

……う、嘘だろ…？

だから、あの日亜子の態度がおかしかったのか？

って事は……

俺は愛莉の呼び止める声を無視して、突然踵を返すと猛スピードで家へと向った。

走っている間、頭の中は亜子の事ばかり。

はぁはぁはぁ

息を切らし、帰っては来たが亜子の鞄がここにある以上家に居るわけがない。
案の定、家の中は真っ暗で人の気配すらない。

今すぐにでも亜子に問いただしたかったが、ここには亜子はいない。
とりあえず家の中に入って落ち着こうと、家の鍵をポケットから取り出すと家のドアを開けた。

自分の部屋に入り、電気を付けた所でリビングから電話の音が耳に入った。
急いでリビングへ向うと電話機の受話器を取り上げ耳に当てる。
聞こえてきたのは義母さんの声だった。

『もしもし、祐樹君？』

義母さんの声を聞いた瞬間閃いた。

そうだ！もしかしたら亜子は、父さん達のところに行ったんじゃないのか？

その考えが頭に浮かんだ俺は焦って挨拶もすっ飛ばして義母さんを問いただしていた。

「亜子はそこに居ますか！？」
『なぁ～に？挨拶もなしに…』
「いいから！教えてください！」
『まぁ！！和弘さんたら子供にどんな教育してたのかしら…？』
「あっ…ごめんなさい…」

『なーんてね、冗談よ。亜子ならさっき来て今は顔洗ってるわ』
「やっぱり！そこに居るんですね？」
『えぇ。心配しなくても、鍵がないってうちに来たから。祐樹君家に帰ってるなら大丈夫でしょ？』
「はい。あの…」
『ねぇ、一つ聞いていいかしら…？』

義母さんが俺に聞きたいこと？一体なんだ？

「な、なんですか？」

ちょっとドキドキして言葉を待っていると義母さんはとんでもない事を聞いてきた。

『うちの亜子の事…どう思ってるの？真剣に答えて頂戴』

俺は自分の耳を疑った。

どう思っているかだって！？な、なにをいいだすんだ…！？

「……どうって…もちろん好きですよ…」
『それは、姉として？それとも女としてかしら？』
「そ、それは……お、女としてに決まって…」
『そう…それを聞いて安心したわ。亜子は責任持ってそっちに帰すから。それじゃぁね～』
「ちょっ！義母さん！？」

俺は呆然と切られた電話の受話器を暗がりの中見つめる。

「なんだったんだよ？今の？」

もう頭の中はぐちゃぐちゃで、俺はその場にへたり込んだ。

## 第１２話：決断した男（後書き）

たくさんの人に読んでもらえてうれしい毎日です。
なんだか長々とここまで来てしまいた。こんな展開でよかったのか！？と自問自答していますが、この話はあと２話か、３話ほどで完結する予定でいます。
最後までお付き合いいただけると光栄です。

## 第１３話：彼女現る

お母さんに送り出されて家への道のりをトボトボと歩く。

その間、私は祐樹の事を考えていた。

初めて会った時の事や、それから今まで一緒に住んできた経緯。

祐樹の彼女に誤解される事数回。

弟として出会ったのにそうは見れなくて…どうしても一人の男としてしか見れない私はこの気持ちを知られれば絶対軽蔑されてしまうと３年間密かに思って来ただけだった。

それなのに今日のお母さんの言葉――――

なんだかこの３年間必死に隠してきたのが馬鹿馬鹿しくなってしまいそうだ。

そう思って私は歩きながら薄い笑いをもらした。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

家の前まで来ると誰かが門のところで壁に背を預けて立っている。

私が一歩一歩近づいて行くと、その誰か私の気配に気がついたのか、

顔を上げてこちらを向いた。

目が合った———

「あなた…祐樹の…」

彼女だ。

何故今ここに彼女が…？

現状把握が出来ないでいる私はその場で固まった。

その間に祐樹の彼女は一歩一歩こちらに歩いてくると、腕を組んで目の前に立ち止まった。

「この間会いましたよね？覚えていますか？」

「……」

そう言った彼女は綺麗な顔が台無しだというほどの形相で睨みつけてくる。

突然の事に私は何も言えないで突っ立ったままだ。そんな私を睨みながら彼女は更に口を開いた。

「あなた、一体祐樹の何なんですか？」

「な、何って…」

「今日突然、祐樹が別れてくれと言ってきました。それってあなた

のせいじゃないんですか？」

別れた――――？

「ど、どういう事…？」

「この期に及んで知らないだなんて言わせない！あの時のあなたの目。あれはなんとも思ってないって言う目じゃなかった！」

「そ、それは…」

「あれから数日しか経ってないのに別れてくれだなんておかしいじゃない！あなた、祐樹に何か言ったんでしょ！？」

「私は…何も…」

確かに私は祐樹の事が好きで…あの時その場を逃げ出したのは事実。
でも…その後祐樹に私は何かを言った覚えは何もない。
あの時の私はそんな資格すらないって言うのに…。

私は軽いパニックに陥っていた。
祐樹の行動に…そして彼女の言っている事に…訳が分からなかった…

その時だった――――

「おい、そこで何やってる？」

「ゆ、祐樹…」

私達の声を聞いて家の中から出てきたのか、そこには祐樹の姿があった…

## 最終話：繋がった心

「ゆ、祐樹…」

その言葉は私が言ったのか、彼女愛莉が言ったのか。

目の前には祐樹の彼女、そしてその後ろには祐樹。

とんでもない状況に陥ってしまったのではないかと私は頭の隅で思った。

「愛莉、お前こんな所まで押しかけてきて、何してる？」

祐樹の声はこれでもかと言うほど怒っているように聞こえる。

「何って…私は祐樹とは別れないって言ったじゃない！」

「しつこい女だな…」

「……っ！」

「オレのこと困らせてそんなにおもしろい？」

「でも！納得できない！」

「じゃあ、これなら納得できるのか？」

そう言って祐樹は私に近づくと突然腰を掴み引き寄せると唇を重ねた。

――――！？

いきなりの祐樹の行動に私は目も開けたまま。

見えるのはアップになった祐樹の顔。そして今唇に感じるのは祐樹のそれ。

背中には祐樹の手が回っている。

心臓はこれでもかと言うほど高鳴って気を抜けば意識を失いそうだ。
そんな私を他所に祐樹はもったいぶるかのように唇を離すと何かを言った。

そして去っていく足音。

しかし、頭が働いていない私はそんなことも気がつかないまま、呆然と突っ立っていた。しかも顔は火を噴きそうなぐらい熱い。

な、なにが起きた！？

ハッと気がついて彼女の方へ目線をやればすでに誰もいない。

そして祐樹のほうへ目線を戻せば真剣な目をして私を見つめていた。

「ゆ、祐樹…今…何を…」
「亜子にキスしたな」
「ど、どうして…」
「どうして？…それを俺に聞くの？」
「……」
「そろそろ姉弟やるのも限界だな」
「え？」

今なんと言った？

姉弟やるのも限界――――

「好きだ……」

そう言って抱きしめてきた祐樹は「ずっと亜子が好きだった」と。
その言葉を聞いた瞬間目に涙が浮かび頬にいくつもの筋をつくる。
ずっと言いたかった言葉。聞きたかった言葉。

これは夢？現実？

そう思わずにいられない。しかし、祐樹のぬくもりが現実だと言う事を証明している。

祐樹は私を離すと目線を同じにして私の顔を覗きこんできた。

その顔はこれ以上ないほど優しい顔だった。

「亜子は…俺の事好き？」

もう何も言葉が出なくてただ、ただ首を縦に振る。
すると祐樹はふっと微笑み、「そっか…」と言って頬を流れる涙を親指で拭った。

「…俺達遠回りしてただけだったみたいだな…言ってみれば簡単な事ことなのに」
「そうね」
「あーあ、もっと早く言えばよかった。そしたら3年も棒に振る事もなかった」
「全くその通りね」
「……」
「……」
「家…帰ろっか…」

「そうね」

満面の笑顔で答える私の手をとり、祐樹と私はたった５ｍの距離を手をつないで家へと帰った。

完

## 最終話：繋がった心（後書き）

これにてこのお話は完結です。
初めて書き上げる事ができたお話をここまで読んでくださった皆様
どうもありがとうございました。
感想などございましたら、遠慮せずにお願いします。
では。水城朱音

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

---

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4752d/

---

恋心

2011年3月19日14時25分発行